第１回若手の会シンポジウム 報告

迫田憲治　（九大院理・A01 班）
石内俊一　（東工大資源研・A01 班）
山北佳宏　（東北大院理・A01 班）

特定領域研究「高次系分子科学」のミニシンポジウムの一環として、第1回若手の会シンポジウムが、平成22年11月26日（金）～27日（土）にホテルニュー水戸屋（宮城県仙台市秋保町）で開催された。淡路島で開催された第5回合同班会議において、総括班評価委員である茅幸二先生から、「特定領域の若手の会のようなものを開催してはどうか。」というアドバイスを頂いたことが端緒となり、仙台で行われる第4回公開シンポジウムに合わせて、若手の会シンポジウムを開催する運びとなった。

本シンポジウムは、インフォーマルな雰囲気のもと、講演者の皆様に研究の背景や将来展望等を自由に話して頂くとともに、各班の垣根を越えて参加者同士で自由に意見交換を行うことで、異分野間での研究プロジェクトを立ち上げるきっかけを探す目的で開催された。若手研究者・大学院生を合わせて26名の参加者があり、予定の時間を大幅に超過して、深夜まで熱い議論が行われた。以下にプログラムを示す。

16:30-17:00　極低温イオントラップを用いた，ホストーゲスト錯体の気相分光
A01班　井口佳哉　先生（広島大学）
17:00-17:30　原子間力顕微鏡を用いた固液界面における液体の構造解析
A02班　木村建次郎　先生（神戸大学）
17:30-18:00　１分子技術で生体回転ナノモーターを視る・操る
A03班　飯野亮太　先生（大阪大学）
20:00-20:30　界面選択的ヘテロダイン検出二次非線形分光
A02 班　山口祥一　先生（理化学研究所）
20:30-21:00　新規時間分解赤外分光法を用いたチトクローム酸化酵素の構造ダイナミクスと機能
A03班　中島　聡　先生（兵庫県立大学）
21:00-21:30　分子科学の将来と理論の役割：5年後，10年後，20年後と50年後
A01 班　八木　清　先生（山梨大学）

前半のセッションとして、まず、A01班の井口佳哉先生（広島大）が、2010年9月まで滞在されたスイス連邦工科大のRizzo研において測定された金属含有クラウンエーテルの電子･振動分光に関する最新データを紹介された。次に、A02班の木村建次郎先生（神戸大）が、AFMを用いた固液界面の溶媒和構造に関して、測定原理から解釈に至るまで分かり易く講演された。続いて、A03班の飯野亮太先生（大阪大）が、精緻な1分子技術を駆使したATPaseの1分子観察・操作の研究結果を紹介された。

夕食をとり、若干のアルコールで参加者の口も滑らかになったところで、後半のセッションとして、3名の講師が講演された。まず、A02班の山口祥一先生（理研）が、新たに開発されたヘテロダイン検出電子和周波発生分光法による界面の分子配向に関する研究結果を紹介された。続いて、A03班の中島聡先生（兵庫県立大）が、極めて高精度の赤外分光システムを用いたチトクロームc酸化酵素のCO光解離ダイナミクスの時間分解分光の結果を紹介された。最後に、A01班の八木清先生（山梨大）が、理論化学の将来展望に関して、ご自身の考えを熱く述べられ、シンポジウムの講演を締め括った。

講演会は、議論が大いに盛り上がったため、予定を大幅に超過して終了したが、講演後に行われた懇親会でも討論の波は収まらず、藤井研（東工大）から提供して頂いたワインを楽しみながら、深夜の 12 時半ごろまで活発な議論が行われた。

最後に、シンポジウムを盛会のうちに終わることが出来たのは、参加者の皆様が活発な討論を行って下さったおかげである。講演者、及び参加者の皆様に厚くお礼申し上げます。合わせて、シンポジウムの開催をお手伝い頂いた藤井研（東工大）の秘書の皆様にも深く感謝申し上げます。